

月 報

— 學 會 —

大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第52回集會記事

期日 昭和15年12月15日 於 金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室

種 村 龍 夫 編

1) 手眞似字典の造り方

鈴 木 忠 光

演者は自己の考案による手眞似字典の造り方に就き論じたり。即ち簡單なる圖形と使用する手指を數字を以て表し、略々完全に之を圖示する事を得るとし、其

數十例に就き一々實際と其記號に就き對稱し實演せり。

2) 耳鼻咽喉科臨床を訪れたる患者の飲酒喫煙に関する調査

齋 藤 進

平 田 秀 雄

酒煙草は嗜好品として廣く世人一般に嗜まれて居るものなり。是に依つて招來する人類の保健衛生延いては子孫に及ぼす影響其他飲酒喫煙の聽器上氣道に及ぼす影響等は既に種々臨床的並びに實驗的に報告されたり。

余等は我耳鼻咽喉科臨床を訪れたる成人患者に就き

飲酒喫煙患者と非飲酒喫煙患者との我科領域疾患に関する罹患率並に各疾患に對する罹患率につき調査せるに次の如き數字を得たり。

検査人員 男子 324名、女子 257名、

内女子は僅かに3名(咽頭2、喉頭1)の飲酒喫煙者を見たるにすぎざれば之は本統計より除外せり。

疾患別	飲酒喫煙の有無				計
	症例數	酒 煙草 \oplus	酒 煙草 \ominus	酒 煙草 \oplus	
	124	26	51	113	324
耳 疾 患	65 52.4%	10 (38.4%)	21 (41.1%)	44 (38.9%)	140 (43.2%)
鼻 疾 患	30 24.1%	11 (42.3%)	21 (41.1%)	46 (40.7%)	108 (33.3%)
咽 頭 疾 患	28 22.5%	5 (19.2%)	7 (13.7%)	21 (18.5%)	61 (18.8%)
喉 頭 疾 患	1 0.8%	0 (0.0%)	2 (3.9%)	2 (1.7%)	5 (1.5%)

以上の數字を觀察するに飲酒喫煙と我科領域疾患との間には目下の觀察範圍に於ては著明なる意義を認め難し。

余等は更に症例を加へ兩者の關係に就き検討を加へんとするものなり。

追 加

豊 田 文 一

我科領域に於ける喫煙飲酒の問題は興味あることである。喫煙による我科領域に於ける直接の影響は暫く措き、喫煙者の唾液中に含まれる「ロダシ」加里は非喫煙者のそれに比し著しく大量であることはかつて石川外科教室に於て關川氏の實驗された所である。尙この「ロダシ」鹽に鹽酸を加ふる時、その唾液、胃液は「チフス」菌、大腸菌等に對し強力な殺菌力を有することは本學細菌學教室に於て榊井氏の實驗により明かにせられてゐる。即ち喫煙は局所に對する直接の作用のみならず、化學的影響も考へられ、我科領域に於ても更に精細に檢索を行つたならば、各種疾患との間にも興味ある結果は得られはしないだらうか。又飲酒に就ては我科領域に於て聽器疾患と關係ありとせられる。私は

かつて聾啞兒の研究に當り、その兩親の飲酒と聾啞發生との關係に就き檢索する所があつた。その際先天性聾啞の父の常習酒客の比率は後天性聾啞の父に比し著しく高率であつた。即ち先天性聾啞の發生にその兩親の飲酒と關係あることを知つた。此の如き事實は内外の文獻にも記載されてある。又實驗的に久しく飲酒せしめたる鼠の子孫は化骨性内耳炎を有するもの多數あることが證明せられ、之より耳硬化症、或は原因不明なる内耳疾患と飲酒、殊に數代連續せる飲酒とは何等かの關係はないかと考へてゐる學者もある。即ち飲酒も亦我科領域疾患、殊に聽器と密接な關係がある様に考へられ、更に詳細なる檢索を期待する。

3) サルバルサン、アグラノチトローゼ治驗例

渡 邊 孝

患者は22歳男子、サルバルサン注射後4日にして發熱、口内疼痛、口臭、流涎等を主訴として來院せるものにして、之か治療に依り完全に治癒せしめ得たり。

尙演者はサルバルサン、アグラノチトローゼの一般論に就き述べ、今後如何にして驅微療法を續行すべきかを考究中なり(自抄)。

追 加

宮 田 暎 一

28歳の婦人に於ける本症の經驗例を追加す。

4) 我科領域異物の統計的觀察(其の1)

宮 田 暎 一

(イ) 外聽道異物

(ロ) 鼻腔異物

昭和3年9月より昭和15年10月に至る約12年間に於ける余の經驗せる我科領域の異物症例總數 205 例中、

先づ外聽道異物69例及び鼻腔異物34例に就て患側、性別、年齢別、種類別並に季節等の關係等を表示し、一二の知見を附言せり。詳細は原著として發表すべし。

5) 鼻醜形と其整形

松 田 龍 一
進 宅 外 雄

3歳の女兒にみられたる先天性の鼻醜形にして、外鼻被覆軟部組織の異常發育によるもので俗にいふ團子

鼻の一層著明なものである。整形前及び後の寫眞を供覽した。

6) 小兒に於ける上顎洞性後鼻孔鼻茸の2例

種 村 龍 夫
齋 藤 進

上顎洞性後鼻孔鼻茸に於ける諸家の症例は年齢的に其殆んど總ては壯年期、青少年期に現はれたるものにして10歳以下の小兒に見られたる症例は極めて尠し。余等は最近8歳並に9歳の男兒に見られたる定型的本症の症例を経験したり。本疾患の研究し盡されたる今日聊か陳腐の事に屬すと雖も敢て報告する處なり。

第1例 8歳の男兒。來院約10ヶ月前より右側鼻閉、鼻漏アリ。次第に増悪し、昨今に於ては右側鼻呼吸は全く不可能となれり。

檢するに右側鼻腔深部は膠様白色なる鼻茸を以て充され、中鼻道に鼻茸莖を證明す。右側後鼻孔は鼻茸を以て充滿さる。上顎洞を開き檢するに鼻茸莖は洞後下

壁粘膜隆起より發生せるを確め、洞粘膜、鼻茸莖、後鼻孔鼻茸の全連鎖を損傷する事なく抽出し得たり。

第2例 9歳の男兒。來院6ヶ月位前より左側鼻閉鼻漏あり。

檢するに左側鼻腔深部に鼻茸様物質あり。中鼻道に帶黄白色の鼻茸莖を見る。左側後鼻孔は鼻茸を以て充さる。上顎洞を開くに莖は洞の側上壁粘膜皺壁より發生せるを證したる後第1例と同じく洞粘膜、莖、後鼻孔鼻茸の全連鎖系統を抽出せり。

共に上顎洞は著しく擴大し、副開口は示指頭大並に小指頭大にして洞粘膜は強度に腫脹せり(精細は近く耳鼻咽喉科臨床に記載)。

7) 珍しき鼻腔腫瘍の一例

松 田 龍 一
太 田 外 茂 次

患者は39歳の男。約1年半前より鼻出血を生じ、其後に至りて鼻閉塞加はり、數次鼻内手術を受けたるも一時的には自覺症候の多少軽減するをみるも、間もなく再び舊に復し更に治に赴かずといふものにつき其經

過、治療につき述べたり。詳細は原著として發表の豫定。尙本症例は爾後の精檢により黑色肉腫と斷ぜらるべきものなる事を知りたり。

8) 口腔粘膜並に眼瞼眼球結膜に發生せる多型滲出性紅斑の一例

小 町 清 吉

由來口腔は其の生理上、食餌、嗜好物攝取發語等を營む關係上、種々の外來刺戟に遭遇する機會多く、各

種の疾患に對し常に侵襲の危険に曝さるゝこと屢々なり。所謂皮膚疾患に於ても口腔及舌粘膜の侵さるゝこ

と勘しとせず。

演者は18歳の男子にて両側頰部粘膜，舌，咽頭，口蓋，眼瞼，眼球結膜に發生し，皮膚發疹は認めざる，

多型滲出性紅斑の1例を経験せるを以て報告し，而して其の原因，粘膜に發生せる該疾患の統計，鑑別診断等を簡述せり。（自抄）

9) 「アフタ」性口内炎に伴ひたる急性披裂環狀關節「ロイマチスムス」

豊 田 文 一

飲食店を業とする35歳の男子，數日前より嚥下時に喉頭部の激痛あり，口内疼痛も伴ひ，加ふるに顎關節の腫脹疼痛あり．爲に牙關緊急存在す．食物攝取困難ありて全身倦怠感あり．口腔内を検するに「アフタ」性口内炎の所見なり．左顎關節は中等度に腫脹壓痛を示す．喉頭所見は右側披裂環狀關節部は強く浮腫狀に腫脹し，蒼白の感あり．同側の假聲帯，聲帯は軽度に發赤し，聲帯の運動は僅かに妨げらる．左側に著變を見ず．音聲は軽度の嘶嘎を帶ぶ．尙右第2趾に數日前よ

り疼痛ありと訴ふ．即ち顎關節，披裂環狀關節，趾關節は一聯の關係を有する「ロイマチスムス」性のものなりと推定し，而もその原因は「アフタ」性口内炎にありとし，兩者に對する治療を行ひ數日にして快癒せしめたり．尙演者は近時唱道せられる Focal-infection に就き觸れ，本症例は口腔内に一つの Focus を有し，その影響が身體の二三關節に「ロイマチス」性の病變を惹起せしめたものであらうと述べた．

質 問 追 加

松 田 龍 一

10) 我教室最近10年間に於ける齒牙囊腫症例に就て

山 田 文 雄

金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室最近10年間に入院手術施行せる本疾患に就き考察し次の結果を得たり．即ち齒牙囊腫症例としては齒根囊腫13例，濾胞性囊腫2例，膿瘍(齒根囊腫?)1例，尙齒牙囊腫，上顎囊腫と記載されたる2例及び3例にして合計20名21症例を算せり．このうち齒根囊腫13例に就き次の諸項に互り考察を加へたるに，

性別 男7，女6，左右側別右側8，左側5，顎別上顎13，下顎0．

發病年齢 12歳未満1，20歳迄3，30歳迄3，40歳迄3，50歳迄3，51歳以上0．

原因齒牙別 門齒2，犬齒2，小白齒1，大白齒5，智齒，過剩齒0，門齒及び犬齒2，犬齒及び小白齒1の結果を得たり．

尙齒牙の性状に就ては總て永久齒にして

明に齶蝕を認めたるもの 6

齒根部肉芽を以て被れたるもの 1
 金冠装着 1
 義齒装置 1
 自然脱落せるもの 1
 齒根切斷様のもの 1
 病的變化なきもの 2

患者の訴並に所見に就ては

頰部腫脹9，頰部疼痛2(化膿性齒根囊腫)，硬口蓋腫脹2，齒齦部膿漏出3，視力障碍1，外力作用3(打撲1，上顎洞手術2)，處置7(切開4，穿刺3)，慢性上顎洞炎6，Gerber氏隆起4，犬齒窩膨隆又は頰囊部腫脹8，洞及び鼻腔隔壁の變化10，上顎洞壓排6，洞粘膜の變化7(清淨なるもの3)等の結果を得，此等の特質，意義に就て述べ文獻症例の興味あるものを引用せり．

(自抄)

質 問

松 田 龍 一

本症に於ける鼻前庭の側壁又は下壁の膨隆即ち所謂ゲルベル氏隆起は囊腫の發生部位及び其大きさに關係するものであることは勿論であるが、それにしても本

調査に於けるゲルベル氏隆起の頻度がすくない様に考へられるので尙一度精査が望ましい。

11) 最近11ヶ年間に於ける我臨床入院患者悪性腫瘍の統計的觀察

開 發 忠 雄

昭和5年1月1日より昭和15年7月31日に至る間の入院患者中悪性腫瘍の診斷をうけたる76名に就て、腫瘍別、性別、年齢別、局所別及び病理組織別に分類し統計的觀察を行ひたり。即ち癌腫66(86.88%)、肉腫6(7.89%)、内被細胞腫4(5.26%)にして、平均年齢は癌腫57.2歳、肉腫43.7歳、内被細胞腫44.7歳を示し、性別的には癌腫は男子に、内被細胞腫は女に多く、局所別に觀れば上顎、喉頭、舌、口腔及び咽頭、鼻腔及び食道の順に罹患率は減少す。病理組織學的に

は癌腫に於ては扁平上皮癌最も多く75.92%、腺細胞癌14.8%、基底細胞癌9.2%、圓柱狀細胞癌1.8%を示し、肉腫に於ては圓形細胞肉腫最も多く、内被細胞腫は混合腫の如き形にて來るもの多し。

癌腫は50-60代に最も多く全體の約3/4を占め、職業的に影響されると考へられるものは舌及び喉頭の癌腫なり。主訴は上顎癌に於ては鼻閉、局所腫脹、喉頭癌に於ては嚥聲、舌癌に於ては疼痛がその尤たるものなり。

12) リガ. フェーデ氏病の3症例

進 宅 外 雄
小 町 清 吉

① 満1年4ヶ月 ♀

約2週間前、舌繫帯下部に約小指頭大の白苔を被へる腫瘍の存在せるを認む。患兒は混合栄養を以て哺育せられ、疼痛、哺乳に障碍なきものゝ如し。齒牙は上門歯2本、下門歯3本にしてその縁端鋭利なり。切除せる腫瘍は病理組織學的には増生を伴へる肉芽腫なりき。

② 満9ヶ月 ♂

約2ヶ月前、舌下面に白斑の存する認め、哺乳に障

碍なきものゝ如し。患兒は母乳栄養にして下門歯2本發生せるを認む。病理組織學的には第1例と同様なり。

③ 満1年2ヶ月 ♂

約1ヶ月前より舌下面に白苔を伴へる腫瘍の存在せるを認む。母乳栄養にして下門歯2本發生せるを認む。病理組織學的には第1例と同様。

以上3例共、その發生原因として齒牙の刺戟によるものとせり。

13) 急性化膿性耳下腺炎に對する「ズルフォンアミド劑」「プロズル」の局所的應用の一經驗

附. 乳様突起手術創の綠膿菌感染に對する本劑の局所的應用經驗

種 村 龍 夫

「ズルフォンアミド」劑の局所的應用は本劑の作用機

轉研究の新しき分野を開拓すべきものにして、近來其

研究は漸く隆盛を來し、各方面に於て臨牀的に効果の甚だ見るべきものあり。

余は先に中耳炎に對する「ズルフォンアミド劑」の局所的療法に就き檢索を加へ注目すべき効果を擧げ得たるは既に再三報告せる所にして目下尙引き續きて研索を重ねつゝあり。

然れ共本問題に對しては各方面に於て未だ應用疾患の種類、藥劑の選擇並に其適用方法、使用時期等に對しては未開拓のもの多く將來愈々研鑽を進むる要あり。

余は最近急性化膿性耳下腺炎に對し、本劑の局所的療法を試み、頗る見るべき効果を得たるを以て一經驗に過ぎざるも敢て之を報告せんとす。使用せる藥劑は Para-aminobenzol-sulfon-natrium-amin にして市賣名「プロズル」注射液なり。

患者は28歳の飲食店の妻女にして來院10日前某婦人科病院に於て輸卵管妊娠の診斷の下に開腹術を施行されたり。其治療中5日前より左側耳下腺部の腫脹を來し、發熱壓痛を來し次第に増悪せりとて來院せり。

追 加

豊 田 文 一

乳様突起鑿開及び中耳根治手術の創面に綠膿菌感染を來せる症例に於て「プロズル」注射液の塗布を行ひ良好なる結果を得た數例を経験した。1例の如きは綠膿菌感染數ヶ月に汎り、「プロタルゴール」、硼酸末、醋

檢するに左側耳下腺部は強度に腫脹、強度の壓痛あり。該部に軽く壓を加ふるに、耳下腺管開口部より帶黄白色の膿流出す。

依て左側急性化膿性耳下腺炎の診斷の下に2日間保存的療法を續けたるも腫脹増大せるを以て該部に切開を加へ排膿を計ると共に、10%「プロズル」注射液の10ccを耳下腺實質内數ヶ所に注入し、本劑をひたしたる綿紗を挿入せり。本療法を續くる事により頗る良好に経過し、何等の障礙を遺す事なく短時日に全治せしむる事を得たり。

附。余は乳様突起手術創の綠膿菌感染を來したるものに對し、10%の「プロズル」注射液をひたしたる綿紗を創内に「タンポン」挿入せるに、極めて良好に経過するを経験せり。

綠膿菌感染に對しては臨牀上屢々困却する場合多き現在一應試むべき一治療法なりと信ず。尙先に余は豊田博士に對し此治療法に就き申述べしに、其後多數の症例に對し追試されしと聞く。此機會に其結果に就て御報告賜らば幸甚なり。

酸バンド液、光線療法等によりても効果を得られなかつたが、「プロズル」使用により旬日にして良好なる肉芽の増生をみた。尙本藥劑使用により肉芽の増生の障礙される様なことはなかつた。

14) 急性化膿性甲狀腺炎症例

小 泉 貞 介

患者 11歳の男児 小學生。初診 昭和15年7月26日。家族歴既往症特記すべきもの無く、特に頸部の外傷、頸部の腫脹せし事なし。現病歴 本年7月18日より軽度の腹痛咽頭痛あり。20日小學校より歸宅後突如40°Cの發熱を伴ひ頭痛咽頭痛強き爲内科醫を訪れ感冒兼扁桃腺炎と診斷さる。其後治療を受くるも38°乃至40°Cの高熱持續し23日に到り頸部左側に疼痛腫脹を來し頸部壓迫感緊張感を訴へ始め26日嚥下不能呼吸困難を來せし故來院せり。

來院時所見 體温38°.6C、脈搏160至、時々昏睡状態に陥り、眼前にて手動を辨せず、電燈の光を判別し

得。瞳孔反射を缺くも眼球突出無し。頭部は廻轉屈曲運動不能にして右側に廻轉せる位置に固定さる。内臟諸器官に著變なし。赤血球45万、白血球27,000。

耳鼻咽喉科的所見 咽頭粘膜は發赤し、口蓋扁桃腺は兩側共發赤腫脹す。頸部は甲狀腺左葉部を中心とし上下に6.5cm、左右に4.5cmの稍々扁平なる不整形の膨隆あり、壓痛強く、嚥下運動に際し僅に移動し皮膚面に發赤あり。波動は著明ならず。

経過並に手術所見 入峯同日頸部に長さ約5cmの縱切開を加へ、筋を剝離し甲狀腺の二層の被膜を切開するに約15ccの濃厚なる膿汁を排出せり。甲狀腺峽部

及左葉下部は硬結せる腺組織にして、左葉上部は残存せず。洗滌を行ひ、ゴム排膿管を挿入す。膿汁よりは連鎖状球菌證明。翌日體温 37°.5C, 視力は略々正常となれり。第3日残存せりと考へし、甲状腺左葉下部より約10ccの排膿あり、呼吸困難は去れり。第11日流動食を攝取し、喉頭検査を行ひ得るに到り左側反回神

經麻痺を伴ひたるを發見せり。45日にして左側反回神經麻痺も治癒し、甲状腺脱落症状も來らず全治せり。

本症例は健康なる甲状腺に來れる急性化膿性炎症にして、扁桃腺炎より血行を介して轉位性に來れるものと思惟す。

15) 「ガソリン」臭による鼻「アレルギー」及び喘息

豊 田 文 一

患者は43歳の履物商。水様性鼻漏と交代性鼻閉塞とを主訴としてゐる。家系に於て腫瘍或は結核の素因を認めない。又喘息乃至は鼻「アレルギー」と思はれる素因もない。この主訴たる水様性鼻漏と交代性鼻閉は13年前よりあり、毎年9月より11月にかけて起り、特に自動車の「ガソリン」排氣臭により忽ち發作性に水様鼻汁が多量に流出し、其後數時間後には必發性に胸内苦悶と發作性咳嗽の定型的喘息が起ると云つてゐる。鼻鏡所見としては兩側鼻粘膜は蒼白色に浮腫狀に可なり著しく腫脹してゐる。殊に下甲介に著明である。中隔は

左側へ強く彎曲してゐる。少量の漿液性鼻汁を認める。咽頭粘膜は軽度に發赤してゐる。内科的には氣管枝喘息と診斷されてゐる。病歴及び局所々見より「ガソリン」臭による鼻「アレルギー」及び喘息と診斷し、鼻腔内の機械的刺戟を除去せんと考へ、鼻中隔有窓切除術を行つた。術後患者の鼻閉塞は非常に輕快し、喘息性發作も最近は消失したと稱してゐる。本症例に於ては實驗的に「アレルギー」の皮膚反應を行つてゐないが、臨牀的に「ガソリン」臭が「アレルギー」として働き、「アレルギー」性發作を起したものと考へる。

16) 「酢の素」誤嚥による食道狭窄の2例

豊 田 文 一

第1例 2歳2ヶ月の男兒、約1ヶ月前に誤つて酢の素を呑んだ。家人の言によれば極めて少量であつたと云つてゐる。當時嘔吐がしばらくあつたが、放置しておいた。然るに2週間程前から流動食以外の食物は嚥下困難を起して嘔吐すると云つてゐる。咽喉頭に異常を認めない。食道直達鏡検査により10cmの所に於て食道後壁に白色の腫脹せる所があり、軽度の發赤を示してゐる。因つて5,000倍「リパノール」液を服用せしめ経過を觀察せる所1ヶ月後には食道壁の腫脹發赤消褪し嚥下障礙も輕快した。

第2例 19歳の男子、主訴 嚥下不能。患者は2歳の時酢の素を誤嚥し、それ以來食道狭窄あるものゝ如く、食事は極めて少量づゝ食してゐる。所が4日前枝豆を食した所その後食事の通過不能となり、流動物すら嚥下不能となつた。2日前より胸部に疼痛を伴ひ、頸部の腫脹及び發熱をも來した。全身症狀増悪し、遂

に私の外來を訪ねた。檢するに咽頭下腔は唾液にて充滿してゐる。食道入口部は僅に發赤腫脹してゐる。食道直達鏡検査を行つた所、入口部直下に白き苔を有し、著しく發赤、少量の膿汁の排出せる所あり。更に深部に入れば食道腔は擴大してゐるが、15cmの所で下方は閉鎖されて癆痕性の狭窄を認める。粘膜は發赤腫脹著しい。異物の存在を認めない。體温 39°2C, 白血球數13,500, 中性嗜好白血球88.5%, 淋巴球8.0%, 大單核球3.5%, 以上の所見より癆痕性食道狭窄に食道炎の合併せるものと診斷し、「リンゲル」液、葡萄糖靜注を以て榮養を保たせ、アゾ系色素等を以て炎症の消褪をうながし、頸部の冷罨法を命じ、絶對安靜を命じた。入院第2日目に熱は下降したが、嚥下不能、胃瘻形成の決心をしたが、第4日目に流動物の微量の流下を來した。其後食道鏡下に「ゾンデー」にて擴張せる所、約2週間後には發病以前の狀態となつた。

17) 臨 牀 瑣 談

吉 崎 欽 次 郎

1) 12歳の男児。本年11月26日頃より顔色勝れず元氣なし。頭痛、發熱著しく軽度の耳痛あり。醫療を受け服藥臥床せり。12月1日初診。聽器に於て左側鼓膜甚だ軽度の發赤あり。對稱的療法を行ふ。

2日檢するに左側鼓膜發赤、膨隆を認む。依て鼓膜切開を奨めたるも行はず。翌日施行。其後更に右側中耳炎を併發鼓膜切開施行す。以來治療を續けたるも良好の轉歸をとらず。次第に腦膜炎の症候を呈し終に死亡せり。

本例は其原發菌の何れかを疑ふも、恐らく何處かに化膿ありて敗血症の状態にて腦膜、中耳に感染したる

ものか。

2) 64歳の女。頑強の體格。

本春以來右半身特に腕の「シビレ」感あり。11月1日突然に嚥下不能に陥り1滴の水も攝取し得ず。檢するに軟口蓋麻痺の像ある他咽喉頭に著變なし。嚥下する瞬間鼻腔に逆流す。

2-3日の治療にて効なし。血液検査により微毒反應強陽性。11月14日より驅菌療法を始めたるに、17日より次第に嚥下し得る様になり、20日より次第に輕快し、次で治癒せり。

(種村抄)

18) 滿 洲 國 視 察 談

松 田 龍 一

金澤醫學會第168回例會

6月24日(火曜日)午後2時より金澤醫科大學法醫學講義室に於て開會、其の演說次の如し。

1. ベンツピレンによる實驗的腫瘍の標本供覽

金澤醫科大學病理學教室

宮 田 榮

河 崎 外 美 雄

余等は催癌性炭水化物 3:4 ベンツピレンを使用し動物實驗中にして、既に得たる腫瘍の標本を供覽す。

實驗動物は成熟せる白色廿日鼠にして、ベンツピレンのオリーブ油溶液毎回 0.5cc を背部皮下に1週1回注射す。溶液の濃度は種々なるものを使用し居れり。其の中 0.5%溶液 0.5cc 注射後放置せるものは約170日目に腫瘍を確認し、0.05%並に 0.005%溶液 0.5cc 宛1週1回注射、8回注射後放置せるものに於て、第1回注射後105日乃至171日にして腫瘍を生じ182日

乃至約200日を以て死亡せり。生じたる腫瘍は組織學的に概して紡錘形細胞肉腫様の像を呈す。但し1例に於て(0.05%注射のもの)紡錘形細胞肉腫様の像を呈するものと同時に相接して別に癌珠を有する類癌様の像を呈する腫瘍を生じたるものあり。從來癌腫は該物質皮膚塗布により生成するが常なるも、余等のものは皮下注射によりて生じ、而も肉腫、癌腫兩種の變化共在するは興味あるものと思惟す。尙上記腫瘍は現在迄に他臓器に於ける轉移を證明し得ず。該組織は移植可能にして、現在第2代目迄の移植成功し居れり。移植腫

瘍組織像も略原組織と同様なり。

の組織培養標本をも供覧す。

尙同時に演者の以前に實驗せる白鼠の同種腫瘍及そ

(追加要旨)

宮 田 榮

同時に供覧せる白鼠に於けるペンツピレン腫瘍は以前にライプツヒ大學内科學教室にて實驗研究せしものにて、廿日鼠のものと同體類似の組織像を有せ

り。而してカレル氏瓶を用ひて體外培養を試みたるに、第2代までの培養に成功せり。以後の培養は都合にて繼續し得ざりしものなり。

2. 人消化管中に於ける膽汁酸に就て

傷 痍 軍 人 石 川 療 養 所

日 置 陸 奥 夫

鈴 木 政 人

本論に於て著者等は健康人に就きその十二指腸液を採取し、所謂B膽汁、乃ち人膽囊膽汁中の非抱合性膽汁酸をより嚴密に検討した。その結果 Trioxycholansäure たる Cholsäure の量は Dioxycholansäure の量に相伯仲する事が立證せられ、同時に Dioxycholansäure たる Desoxycholansäure の量が同じく Dioxycholansäure たる Anthropodesoxycholansäure の量よりも決して多

からざることが知らるゝに至つた。

之は Cholsäure を主體とし、Desoxycholansäure の量之に次ぐ牛膽汁に於けると著しく事情を異にする。

著者等は更に此人體生理に必要な Anthropodesoxycholansäure を膽汁より巧みに製出する一方法を示した。(自抄)

3. 結核の化學療法研究 (第6報)

3.6-Diamino-10-methylacridiniumjodid の細菌發育抑制に關する特異性に就て

傷 痍 軍 人 石 川 療 養 所

中 源 作 太 郎

本報告では先に結核性膿瘍創面に對し若干の治効作用を呈すると記された 3.6-Diamino-10-methylacridinium-jodid に就て Staphylococcus albus, Streptococcus hämolyticus, Bact. pyocyaneus, Bact. coli, Bact. typhi, Pneumococcus, Bac. tetani, Bac. welchii, Bac. histolyticus, Bac. novyi, Rauschbrandbazillen, Para-

rauschbrandbazillen に對する發育抑制作用を検し、結局結核菌に對し現在の所最強力にその發育を抑制しうることを明にした。

本試験には同時に 3.6-Diamino-10-methylacridiniumchlorid u.-bromid をも合せ用ひ比較試験に供した。

— 雜 報 —

學 位 授 與

金澤醫科大學に於て昭和16年5月31日附新潟縣白井

萬司, 6月25日附石川縣村田三郎, 石川縣三輪豊治,

石川縣勝木建次, 石川縣池田知幸, 6月28日附石川縣